

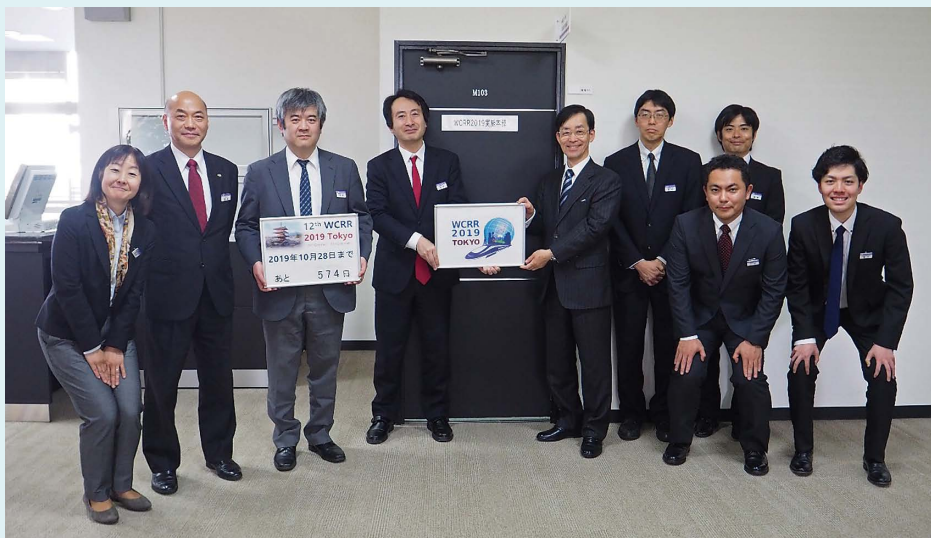
トピックス

WCRR2019実施本部を設置

鉄道総研は、2019年10月28日から11月1日に東京国際フォーラムで開催される第12回世界鉄道研究会議（12th World Congress of Railway Research：略称WCRR2019）を円滑に開催するため、国際業務部に「WCRR2019実施本部準備室」を設置し、活動してまいりました。このたびメンバーを増員して新たに「WCRR2019実施本部」として本格的に準備作業を開始することとなり、4月2日に開所式を行いました。

【WCRRについて】

WCRRは、鉄道研究の価値および利益、鉄道研究および技術開発の向上、国際的な協力および技術情報の共有を使命として1994年から開催されており、世界各国の鉄道技術者とマネジメントが同居する会議です。鉄道研究をリードする国際鉄道連合（UIC）およびフランス国鉄（SNCF）、ドイツ鉄道（DB）、イタリア国鉄（Trenitalia）、英国鉄道安全標準化機構（RSSB）、米国運輸技術センター（TTCI）、鉄道総研からなる組織委員会によって運営されています。



熊谷理事長（中央右）と実施本部メンバー

WCRR 開催一覧

回	会議名	開催地	主催機関
1	WCRR '94	仏・パリ	フランス国鉄
2	WCRR '96	米・コロラド・スプリングス	米国運輸技術センター
3	WCRR '97	伊・フィレンツェ	イタリア国鉄
4	WCRR '99	東京	鉄道総研
5	WCRR 2001	独・ケルン	ドイツ鉄道
6	WCRR 2003	英・エジンバラ	英国鉄道安全標準化機構
7	WCRR 2006	カナダ・モントリオール	米国運輸技術センター
8	WCRR 2008	韓国・ソウル	韓国鉄道技術研究院（KRRI）
9	WCRR 2011	仏・リール	フランス国鉄
10	WCRR 2013	オーストラリア・シドニー	オーストラリア鉄道連盟（ARA）
11	WCRR 2016	伊・ミラノ	イタリア国鉄
12	WCRR 2019	東京	鉄道総研

WCRR2019は、技術者および研究者などの交流に加え、我が国の鉄道技術を全世界の鉄道関係者に向けてアピールする絶好の機会となります。日本での開催は1999年に鉄道総研で開催したWCRR'99に続いて2回目となります。WCRR2019の会議テーマはRailway research to enhance the customer experience（カスタマー・エクスペリエンスを高めるための鉄道研究）であり、鉄道事業者、鉄道産業および鉄道研究それぞれの立場からカスタマー・エクスペリエンスの向上を目指した発表が期待されています。

トピックス 平成30年度拡大経営会議を開催しました

鉄道総研は、管理職約130名を集めた「平成30年度拡大経営会議」を開催いたしました。本年度の会議の議題は、「研究開発のポテンシャルを高める取り組み」としました。

会議は、会長 正田英介の訓示に始まり、理事長 熊谷則道による鉄道総研のミッションに関する講演、常勤役員に

よる研究開発のポテンシャルを高めるための事業展開と目標に関する講演ならびに各研究部などでの取り組みについて研究部長などが報告を行いました。その後、テーマディスカッションにおいて研究開発のポテンシャルを高めるために何をすべきかについて議論を行いました。

記

開催日時：平成30年4月19日(木) 15時00分から17時30分

開催場所：パレスホテル立川(東京都立川市)

参加者：役員、部門長、研究部長など、課長、研究室長ほか 計133名

議 事

1. 訓示 会長 正田英介
2. 鉄道総研のミッション 理事長 熊谷則道
3. 研究開発のポテンシャルを高める取り組み
 - (1) 事業展開と目標

①持続可能な研究所の運営に向けて	専務理事 澤井 潔
②研究開発のレベル向上と成果の品質向上	専務理事 高井秀之
③地域鉄道の活性化を支援する戦略的取り組み	理事 米澤 朗
 - (2) 研究部等の「ポテンシャルを高める取り組み」 各研究部長など
 - (3) テーマディスカッション
 テーマ「研究開発のポテンシャルを高めるために何をすべきか」
 モデレータ：理事 芦谷公稔



訓示を述べる 会長 正田英介



鉄道総研のミッションについて講演を行う
理事長 熊谷則道



ディスカッションでの質疑

トピックス

鉄道総研の職員が平成30年度 科学技術分野の
文部科学大臣表彰を受賞しました

鉄道総研職員が「平成30年度 科学技術分野の文部科学大臣表彰
若手科学者賞」を受賞しました。

受賞者：鉄道力学研究部 構造力学研究室
主任研究員 渡辺 勉(わたなべ つとむ)

【受賞業績：鉄道高架橋の構造物音発生メカニズムと低減対策に関する研究】

鉄道コンクリート高架橋における320km/h以上の超高速化においては、200Hz以下の低周波領域の構造物音の現象解明が急務であったが、構造物音は大規模かつマルチスケールの複雑な連成問題であり、これまでは解析・測定技術が未熟で体系的な検討が不十分であった。受賞者は、構造物音を効率的に解析するため、加振力モデルと構造物振動モデルからなる従来の約10倍の解析効率を有する弱連成系解析手法を開発し、スーパーコンピューターを用いた数万ケース規模のパラメータスタディにより構造物音発生メカニズムを解明した。また、60点の大規模アレイ計測手法を構築し、数値解析の妥当性を実証した。本研究成果は、新形式の高架橋や軌道構造の開発、新幹線の高速化における既設高架橋の対策工の検討等の実務に応用されることと期待される。



表彰状を手にする渡辺主任研究員